

國學院大學學術情報リポジトリ

「孫卿賦」初探：「屈原賦」との関連を手掛かりに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): 荀子, 「賦篇」, 「成相篇」, 「孫卿賦」, 楚辭 キーワード (En): 作成者: 中山, ひかり メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000209

「孫卿賦」初探…「屈原賦」との関連を手掛かりに

中山 ひかり

問題の所在

『漢書』卷三十「藝文志第十」詩賦略（以下「詩賦略」とする）に、次の言説がある。

春秋之後、周道^①衰壞、聘問歌詠不行^②於列國、學^③詩之士逸在^④布衣、而賢人失志之賦作矣。大儒孫卿及楚臣屈原離^⑤譏憂^⑥國、皆作^⑦賦以風^⑧。
（傍線部筆者附、以下同じ）

右の言説によれば、孫卿（荀子）もまた、屈原と並んで「賢人失志之賦」の担い手であった。両者の作品については、同書に「屈原賦二十五篇」「孫卿賦十篇」と記録される。なお「孫卿賦」は、今日では『荀子』「賦篇」（以下「賦篇」

とする）に僅かながら録される。

ならば、「孫卿賦」もまた、「屈原賦」すなわち「楚辭」と同様に古代中国における韻文の意義について考察する爲には論究を避けられないはずである。しかしながら、『荀子』「賦篇」に関する論究は、管見の限り未だ十全ではない。

そこで本稿では、「孫卿賦」の意義に対する考察の第一歩として、「賦篇」及び「成相篇」を題材に採る。その上で、「孫卿賦」の持つ特質についてまず基礎的な要素を整理し、その上で「屈原賦」との関連性について考察したい。

先行研究概観

「孫卿賦」に関する研究成果は、我が国では僅かに安部成得氏「荀子の賦に就いて」^①が認められる。氏は、「賦篇」

及び「成相篇」の様相について、諸家の説を引用の上とめておられる。中国では、主として制作時期や制作者に関する検討がある。なお特に本稿と同様の視点に立つ先行研究には、李金錫氏『屈荀辭賦論稿』⁶に体系的な論及がある他、侯文华氏の『荀子・賦篇』与楚国巫祭仪式关系考论⁷がある。

この類の研究は、言うまでもなく「賦篇」研究の発展において価値なしとはしない。しかしながら、仮に「賦篇」が後人の擬作だとして、あるいは制作時期が異なつたとして、作品自体の価値及び作品を支えた発想について考察する意義が消失するとも考え難い。本稿の主問題である「孫卿賦」の特質⁸に照らせば、先掲の事柄よりもむしろ、朱熹を始めとする先人たちが孫卿の作と見做した点をこそ考慮すべきと思われる。

従つて本稿では「孫卿賦」をひとまず孫卿（荀子）の作とする立場を採り、制作時期や制作者といった事柄には深くは言及しないこととする。

以上が先行研究概観である。次項では、作品検討に入る前に「賦篇」の概要について確認する。

「孫卿賦」及び『荀子』「賦篇」概要

「賦篇」は、孫卿が賦したとする作品を収録した篇である。今日見られる「賦篇」には禮・知・雲・蠶（蚕）・箴の五賦が録され、卷末に「俛詩」が附される。

また現在の『荀子』は、後人の手によつて編纂されたとするのが妥当である。『四庫全書総目提要』に、

漢志儒家、載「荀卿三十三篇」。……題曰、新書唐楊倞分「易舊第」、編爲「二十卷」、復爲「之註」、更名「荀子」。即今本也。考「劉向序錄」、卿以「齊宣王」、來游「稷下」。後仕「楚」。春申君死而卿廢。

とあるのがその証左である。「賦篇」とて例外ではなからう。また「賦篇」篇題注（楊倞注）にも、

所「賦」之事、皆生人所「知」、而時多不「知」、故特「示」之。或曰、荀卿所「賦」甚多。今存者唯此「言」也。

とある。「賦篇」の扱いに関しては、ひとまず右の二説に従い、もとはこの外にも多数あつた荀子の作が後人に

よって一部残されたとするのが穏当であろう。

なお「詩賦略」には「孫卿賦十篇」⁽⁹⁾とあり、今日に至るまで少なくとも半数は亡失したようである。あるいは「賦篇」採録の五篇以外に「十篇」が存在したとも考えられるが、いずれにせよ現時点で確認する手段は無い。

ここで特に言及しておきたいのは、「孫卿賦十篇」の位置である。繰り返しになるが、「詩賦略」には「大儒孫卿

及楚臣屈原離譏憂國、皆作賦以風」との言及がある。ここからは、屈原と孫卿は同系列の賦の担い手であったとする見方が読み取れる。ただし各作品の配列を鑑みれば、その様相は些か複雑さを帯びる。
詩賦略は賦を四類に分ける。各分類を一部参照すると、次の通りである。

(1) 屈原賦二十五篇

唐勒賦四篇
宋玉賦十六篇
趙幽王賦一篇
莊夫子賦二十四篇
賈誼賦七篇
枚乘賦九篇
司馬相如賦二十九篇
淮南王賦八十二篇

……

右賦二十家三百六十一篇
(2) 陸賈賦三篇

枚臯賦百二十篇
朱建賦二篇
……
揚雄賦十二篇
……
右賦二十一家二百七十四篇

(3) 孫卿賦十篇

秦時雜賦九篇
李思孝景皇帝頌十五篇
廣川惠王越賦五篇
長沙王羣臣賦三篇
……
右賦二十五家百三十六篇

(4) 客主賦十八篇

雜行出及頌德賦二十四篇
雜四夷及兵賦二十篇
……
成相雜辭十一篇
隱書十八篇
右雜賦十二家二百三十三篇
() 内数字筆者附⁽¹⁰⁾

これによれば、「孫卿賦十篇」は第三類の筆頭に置かれる。これについて先掲安部氏は「漢代に在つては荀賦は屈辭と對等に取り扱はれてゐたことが解る」とする。順序のみを

鑑みれば、そうした見方も可能である。しかしながら、本稿の問題設定においては、「屈原賦二十五篇」の置かれる第一類には置かれていない点にこそ注目すべきであろう。

第一類には、唐勒や宋玉そして賈誼ら屈原に心寄せた辞賦作家の名がある。それでいて「孫卿賦十篇」を別類に置くのは、一見すれば奇妙にも思える。

「離譏憂國、皆作賦以風」としながらも、「孫卿賦」を「屈原賦」直系の作品と見做さないのは何故か。本文に起因するとすれば、形式上の問題か。あるいは、大旨にそうした判断を生む要素があるのか。この問題に関しては、次項以降に譲る。

また第四類に「成相雜辭十一篇」とある。孫卿には各賦の他に韻文作品「成相」があり、「賦篇」の前に置かれる。楊倞は、「成相雜辭十一篇」と「成相篇」とを同一視しており、朱熹も『楚辭後語』（以下『後語』とする）にてこの説を採る。しかし今日では、『漢書』及び『史記』に本文の引用が認められない以上、同定は困難である。

朱熹は『後語』巻一「成相」において「此篇在漢志號成相雜辭、凡三章」とする。すなわち、孫卿の作とした上で楚辭の系列に取り込むのである。更に、『楚辭後語』の筆頭に「成相」を置くのである。如何なる要素が、斯様な様相を生むのか。

以上の問題点を踏まえると、孫卿の韻文作品における特質を考察する上では、実は「賦篇」よりもまず「成相」に

ついて言及する必要がある。従って次項からは、「孫卿賦」の特質を考察するための一段階として「成相」の特質について言及する。

「成相」について

先に挙げた『楚辭後語』は、本稿の主眼でもある「屈原賦」との関連性を探る上で極めて重要な著作である。更に言えば、「楚辭」に近接した作品を蒐集・考究したという点において、筆者の問題意識に非常に合致する。従って、まずは『楚辭後語』を用いて「成相」の特質について確認したい。

『楚辭後語』巻一「成相第一」

成相者、楚蘭陵令荀卿子之所作也。……

此篇在漢志號成相雜辭、凡三章。雜陳古今治亂興亡之効、託聲詩以風時君。若將以爲工師之誦、旅賁之規者。其尊主愛民之意、亦深切矣。相者、助也。舉重勸力之歌。史所謂五殺大夫死、而春者不相杵、是也。

卿非屈原之徒、故劉向・王逸不録其篇。今以其

詞^①亦託^②於楚^③而作、又頗有^④補^⑤於治道^⑥、故錄以附焉。

朱熹は「成相」の主旨を、「託聲詩以風時君」とする。先掲「詩賦略」にも「離譏憂國、皆作賦以風」とある。孫卿の韻文作品における内容的特質を確認する上では、「風」を一つの指標としてよいであろう。更に言えば、ここでの「風」は、「以其詞亦託於楚而作、又頗有補於治道」とある通り、「屈原賦」と共通する作品制作の動機とも考えられる。関連する朱熹の言説としては、『楚辭辨證』に次の通り見える。

『楚辭後語』序

若^①其義^②、則首篇所^③著荀卿子之言、指意深切、詞調鏗鏘、君人者誠能使^④人朝夕諷誦^⑤、不^⑥離^⑦於其側^⑧。

『楚辭辨證』辨證下「晁録」

此外晁氏所^①取、如^②荀卿子諸賦^③、皆高古。而成相之篇、本擬^④惜誼諫之詞^⑤、其言姦臣蔽^⑥主擅^⑦權、馴致^⑧移國之禍^⑨。千古^⑩一轍、可^⑪為^⑫流涕^⑬。

右記からは、孫卿の韻文作品の中でも「成相」こそが「惜誼諫之詞」に擬えた作であるとの見方が看取出来る。「惜誼諫之詞」は、「姦臣蔽主擅權」という記述からして、先の「風時君」に類似した精神に基づく詞であろう。以上、朱熹の「成相」に関する言説を確認した。次に、「成相」の題意について、原文及び『荀子』「成相篇」各注を適宜挙げながら検討する。

「成相」という題は、楊倞によれば「成功在相」の意から採られたとする。次に言及箇所を引用する。

以^①初發語^②名^③篇、襍^④論君臣治亂之事^⑤、以自見^⑥其意^⑦。故下云、託^⑧於成相^⑨以^⑩喻^⑪意^⑫。漢書藝文志謂^⑬之成相雜辭^⑭、蓋亦賦之流也。或曰、成^⑮功在^⑯相^⑰、故作^⑱成相三章^⑲。舊第八、今以^⑳是荀卿雜語^㉑故降在^㉒下^㉓。

盧文弨はこれに反駁し、次の説を示す。

成相之義、非謂成^①功在^②相也。篇内但以^③三國君之愚闇爲^④戒耳。禮記曰、治^⑤亂以^⑥相^⑦、相乃樂器、所謂春牘^⑧。又古者瞽必有^⑨相^⑩。

「春牘」は、^{うすづ}春く様にして楽節を取る打楽器の類を指すようである。すなわち「相」とは、「宰相」のような身分や「相^{たす}け」といった行動を指すのではなく、楽器あるいは楽曲を指す。この説は、先掲朱熹が引く所の『史記』「史所謂五穀大夫死、而春者不相杵」と合致する。阿部氏も指摘する通り、盧文弼説は優れた説と言えよう。従って筆者は、「成相」の題意について盧文弼説を採りたい。

なお「成相」は、全三章からなる。各章の主題は次の通りである。

(第一章) 請成相、世之殃 国が直面しつつある世の大罪について

(第二章) 請成相、道聖王 聖人と聖王の事績について
(第三章) 請成相、言治方 君主が行うべき統治の方法について

続いて、「成相」の形式上の特徴を、原文及び関連する記述を挙げながら検討する。

結論を先走って言ってしまうと、「成相」の形式は、「屈原賦」に類似した点はさほど見受けられないように思われ

る。第一に、作中において一貫して「兮」字（あるいは音）を用いていない。また、「招魂」に見える「只」字（音）も見えない、なお「俛詩」も同様の特徴を持つ。

第二に、句型も「屈原賦」に忠実に擬えたとは言えない。この点冒頭部を用いて確認したい。

請成相、世之殃、愚闇愚闇墮賢良。

請^{きねうた}ふ成相せん、世^{わざわい}の殃は、

愚闇愚闇の賢良を墮るなり。

人主無賢、如瞽無相何佞俚。

人主に賢無くんば、

瞽に相無きが如くして何ぞ佞俚たる。

請布基、慎聖人、愚而自專事不治。

請^{しんが}ふ基を布かん、聖人に慎はん、

愚にして自ら専らにすれば事治まらず。

主忌苟勝、羣臣莫諫必逢災⁽¹⁸⁾。

主忌みて苟くも勝たんとすれば、

羣臣に諫むる莫くして必ず災に逢はん。

右のような「三／三／七、四／七」の句型は、作中において厳格に守られる。改めて述べるまでもないが、この特

徴は「成相」が明らかな韻文であることの証左である。句型からしても、「成相」が一定の節(リズム)を伴う作であったと推測される。

そして、この句型は「楚辭」のどの篇とも一致しない。仮に「兮」を句同士の間に挿入し、「請成相兮世之殃」あるいは「請成相世之殃兮」とすれば、七字二句の如何にも楚辭風の句となるであらう。しかし、その方法を試みたところで、やはり「四／七」句のほうは如何ともし難い。

以上の特徴からは、まず朱熹が「楚辭」を淵源に持つ作か否かを判断する際に、「兮」字の使用を必ずしも必須としなかったという姿勢が看取出来る。別の言い方をすれば、形式上の特徴のみをして『楚辭後語』収録作の選定を行ってはいないのである。そして、一体如何なる要素が「成相」を「楚辭」の流れに位置づけるのかというと、やはり朱熹の読み取った「風時君」という制作態度が一つの要因として考えられる。

続いて、内容上の「屈原賦」との関連について述べる。

第一に、「讒人」によって「賢能」が「君」から遠ざけられる」という内容がうたい込まれるという特徴がある。先掲「成相」冒頭の「世之殃、愚闇愚闇墮賢良」からして、この型によって発せられる憤りが表出している。また「主

忌苟勝、羣臣莫諫必逢災」とあるように、「諫」という行為が徒勞とならないよう君主に向かって繰り返し訴える。例えば次のような表現である。

論臣過、反其施。尊主安國尚賢義。

臣の過ちを論ぜんには、其の施ひに反れ。

主を尊びて國を安んぜんには賢義を尚べ。

拒諫飾非、愚而上同國必禍。

諫を拒び非を飾り、

愚なるに而も同を上べば國必ず禍ひあらん。

主之孽、讒人達。賢能遁逃國乃蹙。

主の孽(ゲツ、わざわい)は、讒人達す。

賢能遁逃して國乃ち蹙(くつ)る。

愚以重愚、闇以重闇成為桀。

愚以て愚を重ね、闇以て闇を重ねれば成(つひ)に

桀と為らん。

右のような内容的特徴は、言うまでもなく「詩賦略」にいう「賢人失志之賦」の範疇で捉えることが出来る。「離騷」の「不撫壯而棄穢兮、何不改此度」等と言うがごときである。朱熹が「託聲詩以風時君」と評したのも得心がいく。

第二に、「歴代の王と先賢に関する故事の引用と列挙」が挙げられる。これは特に第一章・第二章に顕著である。例えば、次のような表現である。

請成相、道聖王、堯舜尚賢身辭讓。

請ふ成相せん、聖王を道はん、堯と舜とは賢を尚びて身みづか辭讓す。

許由善卷、重義輕利行顯明。

許由と善卷とは、義を重んじ利を輕んじて行ひ顯明なり。

堯讓賢、以為民、汜利兼愛德施均。

堯は賢に讓り、以て民の為にし、汜利兼愛して徳の施し均しくす。

辨治上下、貴賤有等明君臣。

上下を辨治し、貴賤に等有りて君臣を明らかにす。

武王怒、師牧野、紂卒易鄉啓乃下。

武王怒りて、牧野に師し、紂の卒は郷（むき）を易へて啓乃ち下れり。

武王善之、封之於宋立其祖。

武王之を善しとし、之を宋に封じて其の祖を立てし

む。

世之衰、讒人歸、比干見刳箕子累。

世の衰へは、讒人の歸して、比干は刳さかれ箕子と累とはる。

武王誅之、呂尚招麾殷民懷。

武王之を誅し、呂尚招麾して殷民懷けり。

こうした特質は、中島千秋氏が『賦の成立と展開』⁽¹⁹⁾一九において、「賦」における重要な要素として述べられる「敷陳」にも通ずる特質であろう。なお孫卿は、先賢の一人として「孔子」を挙げ、賢王として荀子が仕えたとされる「春申君」を挙げる。孫卿ならではの表現と言える。⁽²⁰⁾

ここで強調したいのは、「讒人」による「賢能」の排斥「君が「賢能」の「諫」を拒む」そして「歴代の王と先賢に関する故事の列挙」という特定の内容を、韻文として表現するという事実が確認された点である。この「成相」の特質は、「楚辭」作品とりわけ「離騷」と共通する。

ただし、「成相」の淵源をそのまま「離騷」に求めようとすれば、いくつかの点において障碍が生じる。というのも、内容上「離騷」にあつて「成相」にはない要素がいくつか存在するからである。まず、「離騷」にあるような一

人称が絶無である。自らの出自や境遇を示す表現はもとより、「余」や「吾」といった自己を示す語もまた認められない。更に「離騷」亂辭にあるような、自身に訪れる悲劇的結末を予期させるような表現も見られない。

以上の相違点を鑑みると、孫卿は「成相」において、あくまで「風時君」すことに注力したのではないかと思われる。「離騷」における屈原のように自らの不遇を剥き出しにするというよりは、世を憂えて憤りを発し、不条理を切々と諫言する姿勢を有するのである。

本項では、「成相」の特質とそれを支えた発想上の背景について、「屈原賦」を手掛かりとして確認した。次項では、本項で示した要素を踏まえ、「賦篇」及び「侏詩」に見える特質について言及する。

「侏詩」の特質

「侏詩」は、「成相」と同様に『楚辭後語』に録される。序には、次の通りある。

朱熹『楚辭後語』卷一「侏詩第二」

侏詩者、荀卿子之所作也。或曰、荀卿既為蘭陵令、

「孫卿賦」初探…「屈原賦」との関連を手掛かりに

……今荀子天下賢士、君何爲謝^レ之。春申君又使^三人請^二荀子、荀子不^レ還。而遺^二之賦^一。蓋即此侏詩也。然此其說又與^レ前異。未^レ知^二其果孰是^一云。

これによれば、「侏詩」は春申君に向けて作られた作である現時点では、「侏詩」の内容からして、そうした経緯のもとに制作されたとしても一応の筋は通る旨指摘するに留めておく。なお引用の説は、『戦國策』や『尚史』など一部の史書に見える。しかしながら、史書のほうでは孫卿が送った作として「侏詩」とは別の韻文が引用される。²³

続いて、「侏詩」の形式上及び内容上の特質について確認する。

まず形式上の特徴として、四字句の使用が挙げられる。「成相」に増して、「屈原賦」を忠実に踏襲したとは言いがたい。

内容的特徴については、「成相」と類似する点が多い。「讒人」に因る「賢人失志」という内容的類似は、特に後掲「小歌」に明瞭に現われる。また「孔子」への言及も、「比干見刳、孔子拘匡」とある。但し、故事の引用はこの句のみである。すなわち、「成相」のように「聖賢の故事の列挙」という様相は認められない。ただし作品の規模からして、

これはさほど重要な差異ではないと思われる。なお、「春申君」の引用も見られない。これは、「俛詩」が春申君に向けて作られた作だとすればかえって理解の及ぶ事象である。送る相手を名指ししては直截な批判に直結し、更なる危険を招く。そのため言及を避けたとすれば、むしろ春申君に関わる表現を欠いておくべきである。朱熹採用の説は、その点においても一応筋が通る。

この他に、「俛詩」独自の「屈原賦」との形式上・発想上の共通点もまた見出せる。第一に、形式上の共通点について言及する。

「俛詩」には、最後段に「小歌」なる段が設けられる。次に引用する。

其小歌曰、
念彼遠方、何其塞矣。
其れ小歌して曰はく、
彼の遠方を念ふに、何ぞ其れ

塞がれる。

仁人詘約、暴人衍矣。
忠臣危殆、讒人服矣。
璇玉瑤珠、不知佩也。
雜布與錦、不知異也。
仁人は詘約し、暴人は衍し。
忠臣は危殆にして、讒人服す。
璇玉瑤珠は、佩ぶるを知らず。
布と錦とを雜へて、異つを知らず。

閭嫫子奢、莫之媒也。 閭嫫・子奢には、之に媒する

莫し。

嫫母刁父、是之喜也。 嫫母・刁父には、是を之れ喜

ぶ。

以盲為明、以聾為聰。 盲を以て明と為し、聾を以て

聰と為す。

以危為安、以吉為凶。 危を以て安と為し、吉を以て

凶と為す。

嗚呼上天、曷維其同。 嗚呼上天、曷ぞ維れ其れ同ぜ

ん。

「小歌」について、朱熹は「九章亦有小歌。此即反詞也」と注する。「九章」とは、嚴密に言えば「九章」のうちの「抽思」篇である。次に、「抽思」篇「少歌」を挙げておく。

少歌曰、

少歌に曰はく、

與美人抽思兮、并日夜而無正。

美人と與に思ひを抽くも、

日夜を并せて正す無し。

憍吾以其美好兮、敖朕辭而不聽。⁽²⁶⁾

吾に憍るに其の美好を以てし、
朕が辭に敖りて聽かず。

(後略)

「抽思」は「小歌（「九章」では「少歌」に作る）」の他に「亂」「倡（唱）」を設ける作であり、「屈原賦」の中でも表現上の変化に富む作である。洪興祖は、次のように注する。

小喩謳謡以樂志也。少、一作小。

補曰、少、矢照切。荀子曰、其小歌也。注云、此下一章即其反辭。摠論前意、反覆說之也。此章有「少歌」、有「倡」、有「亂」。少歌之不_レ足、則又發_二其意_一而爲_レ倡。獨倡而無_二與和_一也。則摠_二理一賦之終、以爲_二亂辭_一云爾。

洪興祖の説によれば、「小（少）歌」は、「離騷」の「亂辭」と同様に「摠理一賦之終」する役割を持つ。これによれば、作品の最後部に全体の総括の段を置くことで、「風時君」の効果を強める効果を持つと考えられる。前掲「侘詩」の直前には「與愚亦疑、願聞反辭」とあるが、「侘詩」

が「風時君」という意図の下に作られたのだとすれば、こうした表現が成された点も筋が通る。

また、「侘詩」には「屈原賦」に共通する比喩表現の多用が認められる。具体的には、「賢能」の美称として用いられる「玉」「鳳皇」といった表現である。

以上を踏まえると、「侘詩」も「成相」と同様に、「風時君」すべく「屈原賦」に共通する内容を用いて作られたと考えられる。

ここまで、「侘詩」の特質とそれを支えた発想上の背景について確認した。

最後に、「賦篇」採録の賦五篇（本稿では、便宜上「五賦」としておく）の特質について確認する。

「賦篇」採録の「五賦」の特質

五賦の主題はそれぞれ異なるが、構成及び主旨についてはほぼ同様である。従って本稿では、第一の賦である「禮」を取り上げる。

爰有大物、

爰に大物有り、

非絲非帛、文理成章。

絲に非ず帛に非ざるも、文理章を成す。

非日非月、爲天下明。

日に非ず月に非ざるも、天下の明と爲る。

生者以壽、死者以葬、

生者は以て壽ことほぎ、死者は以て葬り、

城郭以固、三軍以強。

城郭は以て固まり、三軍以て強し。

粹而王、駁而伯、一無焉而亡。

粹にして王、駁にして伯、一無くして亡ぶ。

臣愚不識、敢請之王。

臣愚にして識らず、敢て之を王に請ふ。

王曰、

王曰はく、

此夫文而不采者與。

此れ夫れ文にして采らざる者か。

簡然易知而致有理者與。

簡然として知り易くして致きはめて理有る者か。

君子所敬而小人所不者與。

君子の敬する所にして小人の不しかせざる者か。

性不得則若禽獸、

性得ざれば則ち禽獸の若く、

性得之則甚雅似者與。

性之を得れば則ち甚だ雅似なる者か。

匹夫隆之則爲聖人、

匹夫之を隆べば則ち聖人と爲り、

諸侯隆之則一四海者與。

諸侯之を隆べば則ち四海を一にする者か。

致明而約、甚順而體、

致めて明にして約、甚だ順にして體なり、

請歸之禮。

請ふ之を禮に歸せん。

禮。

禮。

右の通り、各「賦」は臣下の間に王が答えるという一種の問答体が用いられる。

『文心雕龍』に、「孫卿賦」に対する言説が見られる。次に示す。

『文心雕龍輯注』卷二「詮賦第八」

詩有「六義」、其二曰賦。……然賦也者、受命於詩人、拓_レ字於楚辭也。於是荀況禮智、宋玉風釣、爰錫_二名號_一、與_レ詩畫_レ境。……夫荀結_二隱語_一、事數自環、宋_二發巧談_一、實始淫麗、枚乘兔園。(後略)⁽²⁸⁾

『文心雕龍』ではこの問答体を「隱語」と称する。「隱語」については既に先行研究があるため、そちらを参照されたい。⁽²⁹⁾

この問答体を「屈原賦」との関連という視点から考えると、楚辭における問答体と言えば、主に「卜居」「漁父」が挙げられる。先掲「禮賦」における王の回答「賦此夫文而不采者與」「簡然易知而致有理者與」等からは、「A而B者與」という句型が認められる。これは、「卜居」の「A將B」と全く同様の連問形式と考えられる。Bに置かれる主張が本意あるいは真実である点も、「卜居」と共通する。また問いの結果として、「卜居」では屈原の主張に反駁が成されないまま終わる。「賦」においても、王の答えは正当であり、臣下からの反駁も無い。

このように、「五賦」にもまた、「屈原賦」との内容的な類似性が認められる。

ただし、前項まで述べてきた「讒人」による「賢能」

の不遇」や「君が「賢能」の「諫」を拒む」といった内容的要素は認められない。すなわち「孫卿賦」には、「成相」や「侓詩」ほどには「風時君」という態度が表出していない。そのため、「詩賦略」において類を異にし、「楚辭後語」にも採られなかったと思われる。その意味で、安部氏が「孫卿賦」が『後語』に採られない理由について「楚賦の系列に置くにはその形式が余り変つてゐるからであらう」三〇と言われたのも理解出来る。

ここまで、孫卿による韻文作品について「屈原賦」との関連を探りつつ検討した。次項では、本稿の検討をまとめ、結論とする。

結論と今後の展望

今回は、孫卿による韻文とされる「成相」「侓詩」「五賦」の特質について、「屈原賦」との関連を手掛りに検討を行った。

検討においては、主として形式上及び内容上の二視点から各作品の特質を整理した。また本稿の問題設定上の観点から、検討には『楚辭後語』に見える言説を中心に用いた。検討の結果、孫卿による韻文作品はみなその内容上におい

て「屈原賦」に共通する特質を持つとわかった。それは、朱熹の言葉を借りれば「風時君」という大旨である。孫卿は「風時君」のために、種々の「屈原賦」と類似する表現を用いたが、とりわけ「成相」及び「俛詩」においてその傾向は顕著に認められる。そのため、『楚辭後語』にもこの二作が採られたのではないかと結論を得た。

本稿における問題を考察するにあたり、まず先行研究において未だ総括されたとはいえない「孫卿賦」全体の様相を把握する必要があった。そのため、本稿の言及範囲はごく基本的な事項の指摘に留まった。

筆者は、「屈原賦」と「孫卿賦」に通底する「発想上の型」(現段階では、古代中国の韻文表現において存在したであろう「表現する内容と様式との強固な結びつきにより、独自の効果を生む」という共通理解と仮定する)が存在すると推測しているが、今回はそうした段階の考察まで至らなかった。今後の課題としたい。

注

(1) 『漢書』二十四史點校本、中華書局 一九七〇年 一七五六頁 一行—三行。以下『漢書』の引用は同書に従う。

(2) 『國學院雜誌』第五十七卷第二号 四十八—五十二頁、國學院

大學綜合企画部、一九五六年五月

(3) 氏は、「賦篇」及び「成相篇」の様相について、諸家の説を引用の上まとめておられる。「反辞を有する俛詩も、楚辭と同様に民間文学を裏附けにしてゐる新形式の文学と見るべきではあるまいか」(同五一頁下段十九—二十行)「荀子は文才が豊かで、……技巧とか表現とかいふ方面に於いても見るべきものがあるが、儒学者としての立場があまり際立ちすぎて、その内容は殆ど儒学思想を丸出しにしている」(同五二頁上段一—四行)など、種々の示唆的な指摘が認められる。しかし、そうした指摘に対する詳細な考証が成されていないのが悔やまれる。

(4) 趙達夫『荀子・賦篇』包括荀卿不同時期兩篇作品考『貴州社会科学』三二—三九頁、一九八八年四月

(5) 马世年『荀子・賦篇』体制新探——兼及其賦学史意义『文学遺產』二二—三三頁、二〇〇九年四月「賦篇」所収の各作品に対し、問答体を用いる点から、荀子一人の作ではないとする。その上で、漢代辭賦において同様の形式が認められると指摘する。张小平『荀子《賦篇》的真伪问题及研究』『江淮论坛』九五—百二頁、一九九六年六月「賦篇」の偽作説に関する検討。

(6) 春风文艺出版社出版、一九八六年。

(7) 『中国文化研究』二〇一一年二月、三九—四六頁

(8) 『荀子集解』(新編諸子集成 王先謙撰 中華書局 二〇一〇

年) 四七二頁七行―八行。以下『荀子』の引用は同書に従う。

(9) 『漢書』一七五〇頁十行。

(10) 『漢書』一七四七頁二行―一七五三頁八行撮要

(11) 『楚辭集注』(楚辭要籍叢刊 黃靈庚點校、上海古籍出版社、

二〇一五年) 所収、二六七頁三九行

(12) 同右二六五頁七―九行

(13) 晁補之撰「續楚辭」「變離騷」の二書を指す。朱熹はこの二書に基づき、『楚辭後語』を編纂した。

(14) 『楚辭集注』所収、二五八頁八―十行

(15) 『荀子集解』四四五頁一行―三行

(16) 『荀子集解』四四五頁四―七行

(17) 『楚辭後語』採録の全五十二篇を通覧すると、他に「兮」を用いない作は漢高帝「鴻鵠歌」・陶潛淵明「歸去來辭」・韓愈「別知賦」「弔田橫文」・柳宗元「乞巧文」・王文公安石「書山石辭」「寄蔡氏女」の七篇あり、「成相」と「俛詩」を加えると凡て九篇となる。すなわち、少なくとも、「成相」と「俛詩」のみが例外という訳ではない。また『楚辭後語』序に、「鼂氏之為此書、固主於辭而亦不得不兼於義。今因其舊、則其考於辭也宜益精、而擇於義也當益嚴矣。此余之所以兢兢而不得不致其謹也」とあり、朱熹が『楚辭後語』収録作の選定に対し厳正な判断に努めた旨看取出来る。『楚辭集注』提要においても「晁氏續離騷凡二十卷・

變楚辭亦二十卷、後語刪爲六卷。去取特嚴」との評価がある。

(18) 『楚辭集注』(楚辭要籍叢刊 黃靈庚點校、上海古籍出版社、二〇一五年) 所収、二六八―二六九頁。以下、「成相」の出典はすべて本書に拠る。

(19) 関洋紙店印刷所 一九六三年

(20) 「世之愚、惡_レ大儒_一、逆_レ斥_レ不通_一孔子拘」。展禽三緘、春申道_レ級基畢_一輪。「屈原賦」における「孔子」の不出は改めて述べるまでもない。『楚辭後語』収録作に広げてみても、荀子の二作を除けば東方朔「七諫」「孔子過之以自得」のみである。

(21) 『楚辭集注』(楚辭要籍叢刊 黃靈庚點校、上海古籍出版社、二〇一五年) 所収、二七八頁九行―二八〇頁一行

(22) 『戰國策校注』(叢書集成初編 中華書局 一九九一年) 卷五「楚」。

(23) 『尚史』卷八十六 繫六「諸子傳」。

(24) いま『戰國策』所収の文を挙げておく。

(因為賦曰、) 寶珍隋珠、不知佩兮。禮衣與絲、不知異兮。閭姝子奢、莫知媒兮。嫫母求之、又甚喜之兮。以瞽為明、以聵為聰。以是為非、以吉為凶。嗚呼上天、曷惟其同。詩曰、上天甚神、無自療也。

「因為賦曰」以降の四字句の韻文は、「俛詩」の「小歌」の一部が引かれる。また「兮」の使用が認められるが、「俛詩」に

おいては「也」に作る。また『詩經』の引用が最後部に置かれる。これらの特徴は、本稿にて言及する『荀子』所収の韻文作品とは大きく異なる要素である。ただしこの文は現行本『荀子』に採録がないため、別の機会に論じたい。

- (25) 『荀子集解』は「曰」を「也」に作るが、ここでは『楚辭後語』を採る。

- (26) 『楚辭集注』（楚辭要籍叢刊 黄靈庚點校、上海古籍出版社、二〇一五年）一〇九頁九行

- (27) 『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊 黄靈庚點校、上海古籍出版社、二〇一五年）二二二頁二行—四行

- (28) 『文心雕龍校注』（中國學術名著）世界書局 一九六六年

- (29) 包遵信「浅谈《荀子·賦篇》」（『文史哲』一九七八年 六八—七三頁）、卢光霞「论《荀子·賦篇》在賦史上的地位」（『承德師專学报』一九八六年五十九—六十二頁）など

- (30) 前出「荀子の賦に就いて」五十頁下段四—五行

〔キーワード〕 荀子、「賦篇」、「成相篇」、「孫卿賦」、楚辭